

サルコイドーシスと疫学

—歴史的視点から—

名誉会員 重松逸造

ロンドンのBlackfriars 皮膚科病院医師Jonathan Hutchinsonが、世界で最初に58歳男子のサルコイドーシス皮膚病変を観察したのが1869年（明治2年）、それを記載したのが1877年（明治10年）とされているが、これより50年余を経た1921年（大正10年）に、東北帝大医学部の竹谷実が34歳と70歳の女子2名についてわが国最初の本症皮膚病変を報告したことは周知の通りである。

一方、疫学はその考え方や実践面のいくつかをとりあげれば、Hippocrates以来存在していたことになるが、近代疫学という意味では、1850年（嘉永3年）に創設されたLondon Epidemiological Societyの発足などをその発祥とすることができよう。疫学のバイブルといわれるJohn Snowの著書“コレラの伝播様式について”は1855年（安政2年）に出版されている。なお、米国でAmerican Epidemiological Societyが設立されたのは1927年（昭和2年）のことである。

わが国への西洋医学の本格的な導入は、もちろん明治時代になってからのことであるが、1885年（明治18年）に英文で発表された高木兼寛の脚気研究や1907年（明治40年）に出版された緒方正清のくる病調査報告書“富山県奇病論”などは、今日のレベルからみても優れた疫学研究とすることができる。しかし、わが国で疫学の名称が公式に用いられた最初は、1930年（昭和5年）に設置された東大伝染病研究所疫学研究室（主任：野辺地慶三）で、この研究室は1938年（昭和13年）より公衆衛生院疫学部（部長：同前）に引き継がれて、その後20年以上にわたりここがわが国唯一の公的疫学研究施設であったことは、わが国における疫学の普及度が欧米に比べてそれだけ遅れていたことを示しているといえよう。

サルコイドーシスと疫学の接点が大きくなるのは、第二次大戦後の米国で復員軍人間に本症が多発したことから、米国主導の形で第1回（1958年ロンドン）と第2回（1960年ワシントン）の本症国際会議が開催されたことによる。両会議とも議題として診断基準や病因の問題とともに、疫学をとりあげており、特に第2回の会議では地理疫学が重点課題となっていて、前年の1959年（昭和34年）に日本を含む特定の国々に本症の疫学データ提供の呼びかけが行われた。

当時のわが国は、疫学の研究対象を感染症から循環器疾患やがんなどの非感染症に拡大しつつあったが、それでも“高血圧症の疫学”や、ましてや“健康の疫学”とは何ごとかこのような疫学の使い方に反対の人がいたことは事実で、今日からはちょっと想像し難いくらいであった。これには言葉の問題がからんでおり、日本語の“疫”は“はやりやまい”，つまり伝染病を意味していることから、疫学は感染症に限るべきだという考え方であるが、横文字のepidemiologyは語源的に“疫”のような“病いだれ”的な感じがないためか、非感染症に対してもあまり抵抗なく使われたものと考えている。因みに、中国では疫学のことを流行病学と呼んでいる。

ところで、上述した米国からの呼びかけに対して、本症臨時疫学調査班（班長：岡 治道）を組織したわが国の対応については、筆者が既に本誌（2003：23：3-10）でも述べているので繰り返さないが、これを契機にわが国のサルコイドーシス研究が急速な進歩と発展を遂げたことは周知の通りで、その先導役を果たしたのが疫学だと考えている。また、臨時疫学調査班が実施した本症患者の全国調査と患者登録システムは、1972年（昭和47年）より開始された本症を含む国の難病対策のモデルとして、各難病疾患の調査に応用されている。

最近の疫学は、守備範囲をさらに拡げて分子レベルの情報に基づく分子疫学の分野を確立しつつあるが、サルコイドーシスの病因解明を目指して、疫学がこの分野からも貢献することを期待している。

